有限会社 大坊建設

大村 様邸

ユーザー訪問

DATA
三戸郡三戸町豊川
2003年5月竣工（リフォーム）
■延べ床面積／70坪（231.86㎡）
■使用青森県産材／スギ（もや、垂木）など。

玄関に格子入りの4枚引き戸が建つ和風住宅の大村様邸。平屋で70坪あり、建物の両端が広角レンズに収まり切らないほどに間口が広い。屋根の端が反り返る、神社仏閣を想わせる厳かな外観を見る限りは新築住宅であるが、実は築100年を超える古民家を大幅にリフォームしたものだと知って、驚く。大村様が、幼馴染みという㈲大坊建設の大坊幸吉社長に依頼し、半年がかりで新築同然にリフォームした大村様邸の室内には、現わしの太い梁が組まれた100年前の面影がそのまま残されている。

築108年の土壁の家 コーラのビン凍る寒さ

ご主人の話　リフォームしたのは9年前です。その時点で家は築108年でしたから、今（2012年）は築117年になります。リフォームしたときにしっかりと断熱材で覆（おお）ってく

築100年を超える歴史を感じさせる室内

れたおかげで、冬場はストーブ1台で暖かく過ごしていますが、その前までは、コーラのビンが凍って割れるくらい寒くてたいへんでした。何しろ100年以上前の家だから、断熱材といったものはもちろんなくて、土壁の隙間から風が吹き込んでいましたからね。ふつう、築100年ともなれば壊して建て替えるところでしょう。その考えもあったんですが、100年経ってもまだちゃんと建っているということは、それだけ建物が頑丈に造られているという証明になりますよね。大坊さん(大坊幸吉社長)に声をかけて、家を見てもらったら、土台がしっかりしているので充分リフォームできるとのことでした。それで踏み切ったんです。

大坊社長の話　リフォームするか、建て替えるかの判断の分かれ目は、土台です。土台が腐っていれば難しいんですが、大村さんの家は、丸い石に乗せたクリの木の土台がほとんど傷んでいなくて、もうあと100年は持ちそうなほどにしっかりとした状態でした。土台は、津軽ではヒバですが、県南ではクリです。クリは堅くて腐りにくいから100年以上も持っているんですね。ジャッキで家を持ち上げて、新しく打った布基礎の上にまた土台を下ろしました。建て替えてしまえば何から何まで部材は新しくなりますが、ただ、既存の家に使われている8寸のケヤキの太い柱とか、頑丈なアカマツの梁や、差鴨居(さしがもい)といった部材とそのまま同じ内容で建てるとなると、とんでもない金額に跳ね上がってしまいます。既存の家の見事な木材を生かせるところがリフォームの大きな利点ですね。

ご主人の話　最近の新築の家って、玄関や廊下が狭いですよね。部屋も小さく区切られていて、家の中が狭苦しいような感じを受けます。うちの(常居(じょうい)の隣を指差して)玄関ホールだ

頑丈なアカマツの梁が交差する居間

けでも、一部屋ぶんの広さがあります。もともとそこは土間だったところに床を張ったんですが、孫の遊び場にちょうどよくて、走り回っていますよ。細かに間仕切らずに、頑丈な太い柱と太い梁をつないで、どーんと大きく空間を構えたところが昔の家の魅力ですね。

地震に耐える〝木組み〟日本建築に合う昔の技

大坊社長の話　常居（じょうい）（居間）の天井までが3メートル60センチあります。広くて天井も高いから圧倒的な開放感ですよね。リフォームする前には縄で縛った屋根の茅が下から見えていました。天井が高くて、部屋が広くて、それで断熱材が入っていないのだから寒いわけですが、換気が良いぶん木も長持ちしてきたんです。大村さんの家は、すべてご先祖が所有する山の木を伐り出して建てられたものです。100年以上経っても、クリやケヤキやアカマツなどはちっとも傷んでいないばかりか、あと100年も持ちそうなのだから、あらためて木ってすごいもんだなと思いますね。昔の家には〝筋交い〟はありませんが、その代わりに太い柱と太い梁をつなぎ、梁と梁をがっしりと組み合わせる〝木組み〟によって、家に強度を持たせていたのです。

木の栓を打ち込んで堅牢に組まれた柱と差鴨居

ご主人の話　ここのすぐ隣が大工さんの家なんですが、建て替える前は、うちと同じ築

堂々とした風格をかもし出すスギ製の神棚

今では使われなくなった昔の技法がいたるところに施されている

100年以上の古い家だったんです。リフォームしたわが家を見て、壊さなきゃ良かったって悔やんでいましたよ。

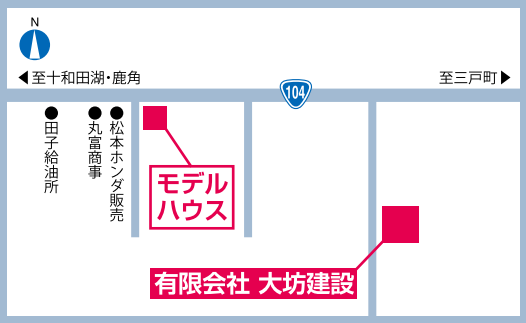
大坊社長の話　100年の間には大きな地震が何十回となくあったでしょうから、その揺れに耐えてきたということです。木を組む建て方が、地震の多い日本の建築に合った技なんですね。金物の登場によって今の建築には使われなくなった柱と梁をつなぐ込栓（こみせん）や鼻栓（はなせん）（註）といった昔の技法も、この家には残されています。貴重な古民家です。

ご主人の話　リフォームして一番喜んだのは、当時高校生だった娘です。以前は外にあったトイレと風呂が、家の中に付いたことが嬉しかったんですね。そのことがまた一つ思い出として、この家の歴史に刻まれました。

註…「込栓（こみせん）、鼻栓（はなせん）」…柱と桁などの仕口を固定するために2材を貫いて横から打ち込む20ミリ角程度の堅木材。貫通させたホゾの先に打つのが鼻栓。

有限会社 大坊建設

本　　社●三戸郡田子町大字田子字下田子69-4
TEL.0179-32-3580 FAX.0179-32-3582
http://www.ii-ie.net/daibou/
E-mail : kouki299@leaf.ocn.ne.jp
八戸営業所●八戸市下長5丁目9-9
TEL.0178-28-2798 FAX.0178-21-3558



玉田工務所

菊池 様邸

ユーザー訪問

DATA
青森市桜川
2012年9月竣工
■延べ床面積／42坪（139.12㎡）
■使用青森県産材／スギ（外壁、ウッドデッキ）など。

土地を求めて家を建てる――菊池様の場合もその計画で、土地探しから始まった。土堤から川が眺められる川沿いの分譲地にご夫婦は心惹かれた。高校生がボートを漕ぐ練習光景が見られる堤川である。近くの河口からウミネコも飛んでくるのどかなロケーションは文句なしだが、土地が変形の三角だった。その形状が家を建てるのに支障にならないものかどうか、専門家に見てもらうことにした。電話をかけた先が、玉田工務所であった。

遊び心をくすぐられる〝男の隠れ家〟的雰囲気

奥様の話　雑誌に紹介されていた住宅の中から、主人とわたしが、一番好きなのはどれ、と選んだら、指さしたのが同じ玉田工務所の家だったんです。玉田さん（玉田健悦棟梁）の家って、落ち着いた雰囲気があって、新築なのに古い歴史が刻まれているような独特の渋味がありますよね。わたしの友だちが3年前に玉田さんで建てたお家もそうで、木の「茶」色と、塗り壁の「白」とがしっとりと調和していて、雑誌の住宅の雰囲気と同じでした。

ご主人の話　拝見した玉田さんの『リフォーム展示場』（弘前市南城西）にしても、一見して玉田さんが手がけたと分かる独特のカラーがありますよね。〝玉田カラー〟というんでしょうか、印象に統一感があります。展示場で私が気に入ったのは、〝遊び心がくすぐられる〟ようなハンモックのあるウッドデッキと、〝男の隠れ家〟的な屋根裏部屋でした。

奥様の話　わたしは、ヨーロッパで暮らしていた頃に住んでいた白壁の住まいに通じる雰囲気があって、懐かしさを覚えました。これなら合うな、と内心

堤川そばののどかなロケーションに立地する菊池様邸

欧風の雰囲気をかもし出すリビングルーム

思いましたね。

ご主人の話　土地の二方が道路に面しているから、玄関の位置も二つ考えられるし、川に面しているのでいつも川面が眺められるようにリビングを2階に設けることも考えましたし、それと建築士をしている妻の父から提案されたプランも含め、時間をかけてあれこれじっくりとプランを練りました。玉田さんは、「菊池さんの家づくりを私たちはお手伝いするのです。世界に一つしかない〝一品もの〟の家を造るのですから、どうぞ気が済むまで考えてください」と見守ってくれました。

奥様の話　さっきお話ししました友だちが、「ああすれば良かったこうすれば良かったというところが一つもなかった」と言っていたのがとっても印象深

リビングとひと続きになった開放的なキッチンスペース

かったんです。ふつう家って、住んでみてから失敗した点に気がついて「ああすれば良かったこうすれば良かった」と後悔して、それで「3回建てないと満足する家は建たない」と言われているんでしょうけど、その友だちは、「一つもない」って言い切ったんです。

外壁の板1枚1枚張る職人の念入りな手仕事

ご主人の話　プランの打ち合わせを何回も何回もくり返して、それこそ図面上では〝何十軒も建てました〟から、もうあとは玉田さんに一切お任せと肩の荷を下ろした気分でいたら、工事が始まってからの玉田さんの細部の造りの念の入れようには、さすがに職人と脱帽する思いでしたね。テレビの上に設ける棚一つとっても、わざわざ現場でテレビの代わりに新聞紙を壁に貼ってみてちゃんと手の届く高さに決める、といった細かさでした。

ステンドグラスが引き戸を開けた時に暗くならないようにと引き戸にもガラスがはめ込まれている

奥様の話　それと、玄関ホールの脇に作ってもらった物干し場の入り口戸にしても細かな気遣いをみせてくれましたよ。引き戸の左側の壁に、インテリアとしてはめ込んだステンドグラスが、引き戸を開けたときに、戸の陰になって暗くならないように、引き戸にもガラスをはめ込んでくれました。そういうことって、われわれには考え及ばないことで、出来上がってしまってから気が付くのでしょうけど、玉田さんは必ず先に立って導くようにアドバイスしてくれるんです。はめ込んだステンドグラスにしても、アンティーク雑貨の店で買う時にわざわざ玉田さんも立ち会って選んでくれたんですよ。

ご主人の話　よその現場では

白壁と木の調和が随所にヨーロッパの香りを漂わせている

外壁にサイディングがバタバタと張られているのに、うちのところでは、大工さんが板に1枚1枚塗装しては、丁寧に1枚1枚丁張っているんです。見ていて、手仕事だなあ、って感じましたね。

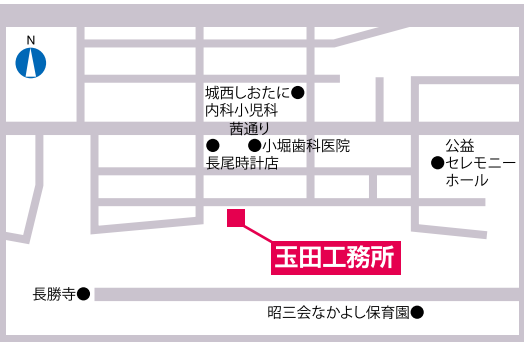
奥様の話　どんな小さなことでも、ここどうしますかって、一つ一つ確認してから建てるんです。階段の手前の格子にしても、格子の間隔をもっと狭くするか、広い方が良いか、一つ一つ確認するんです。ほんとの手作りですよね。「お任せしますから」と言葉が出そうになったくらいの念の入れようでした。実際に建ててみて、不満点が「一つもない」と言っていた友だちの満足感が実感できました。

ご主人の話　休日には(掃出し窓の外を指さして)ウッドデッキでコーヒーを飲むんです。暑い盛りは夕涼みしながらビール。さかさまに置いたリンゴ箱がテーブルです。私の〝遊び心〟をくすぐる〝場〟ですよ。

“津軽の家”

玉田工務所

弘前市大字南城西2-7-4
TEL.090-2604-2967
http://www.tamada.e-arc.jp/
E-mail : sumai@tamada.e-arc.jp



日野建ホーム 株式会社

N・K 様邸

ユーザー訪問

DATA
青森市西滝
2012年8月竣工
■延べ床面積／38.70坪（128.23㎡）
■使用青森県産材／スギ（柱、梁、床、羽目板、建具）、このほか構造材は土台が青森ヒバなど断熱パネルの枠を除くすべてが認証青森県産材。

完成見学会に訪れたN様が、玄関から入って真っ先に感じたのは、室内の空気の〝しっとり感〟だった。乾きすぎず湿りすぎず、喉にしっとりとくる空気の程よい柔らかさ――そのことが印象に強く刻まれた。廊下やリビングの床から伝わってくる無垢のスギの心地よい感触。白い漆喰（しっくい）壁と木肌の色合いの調和。N様が、自然素材による家づくりに心惹かれるようになったのは、2年前に日野建ホーム㈱のこの見学会で『無添加住宅』と出会ってからである。

空気が喉に〝しっとり〟スギと漆喰の調湿効果

ご主人の話　スギには湿気を吸ったり吐いたりする〝調湿機能〟があるのだと、その見学会で社員の方が説明してくれました。漆喰にもあるのだそうです。スギと漆喰の二重の調湿効果で室内の湿度がちょうどよく保たれるから、しっとりと感

洋室の壁にポイントとして張ったスギ板も室内の調湿に一役買っている

じられるのでしょう。

奥様の話　その頃住んでいたアパートの室内が、とくに冬になると暖房で乾燥しすぎて、喉がイガイガしていたんです。主人もわたしも、2歳の娘もそうでした。それで、見学した家の空気の柔らかさを喉が敏感に感じたんでしょうね。立ち止まって深呼吸していましたよ。

ご主人の話　スギの床に触れたのは、見学会のときが初めてではありません。職場の上司が8年前に新築した家の床がスギでした。県産スギだそうです。拝見しにおじゃまするとと、靴下を脱いでみるように上司に勧められて、歩いてみたら、

スギの板が敷き詰められたリビングや食堂の床は、足裏から心地よさが伝わってくる

素足と木がなじむと言うんでしょうか、足裏から心地よさが伝わってきました。そのときの無垢材の感触が、2年前の見学会でよみがえった気がしましたね。

中村政永ホームアドバイザーの話　県産材を使って建てることがN様の第一要望でした。単に〝県産材〟というのではなく、N様はあくまでも〝認証青森県産材〟にこだわりを持っていました。認証青森県産材とは、青森県内の山で育った木を、青森県内の製材所で製材した正真正銘の〝青森県の木〟のことです。その徹底したこだわりは、地産地消に貢献したい、というN様の強い思いの表われです。1、2階の床に張ったスギ板は、特A級材と呼ばれる無節の上級品で、厚さが28ミリ。全室の腰壁に張っているスギの羽目板も節無しです。産地は同じ鰺ヶ沢町で、それを弘前市の製材所で製材したものです。裏話を申しますと、木材の産地を証明するのは困難なことらしく、「青森県西津軽郡鰺ヶ沢町産のスギである」との認証を得るまで結構たいへんだったんですけど、N様のこだわりが強い分だけわれわれも頑張って、なんとか証明書を取り付けることができました。

地中熱利用の冷暖房 老後にこそ快適な家

ご主人の話　省エネルギーにもこだわりました。エネルギーロスの極めて少ない高断熱・高気密の家で、さらに高効率の冷暖房装置を設置してこそ〝燃費〟の良い生活ができますからね。知人が2年前に日野建ホームで新築した家がそうでした。冷暖房は、地中熱とヒートポンプを組み合わせた地中熱ヒートポンプシステムです。わが家にも導入することにしました。

中村政永ホームアドバイザーの話　N様のお宅の「Q値」は0・86W／㎡Kです。Q値とは、住宅の断熱性能を数値で表

1年を通じて室内を快適な温度に保つ高効率の冷暖房装置

和室の腰板にもスギの羽目板が張られている

した熱損失係数のことです。地域ごとに目標となる全国次世代省エネ基準が設けられていまして、青森地区よりも厳しい北海道地区でも「1・6W／㎡K」ですから、それよりも高い基準をクリアしているということです。

ご主人の話　暑い盛りに越してきましたが、部屋の中に入るとスッと涼しかったですね。冷風が噴き出るエアコンと違って、「パネルの表面を結露させて熱を奪い取る輻射式の冷房」だと中村さんから説明を受けていましたが、そのとおりに、機械で冷やしているという感じはまったくなく、肌に優しい自然な涼しさです。健康にいいな、って体が分かりますね。

マイホーム完成を記念する家族の手形を押したモニュメント

奥様の話　県産材を使って家を建てると、家具などと交換できる「エコポイント」が県からもらえるのだそうです。それを使って、リビングから外に出られるように県産材のウッドデッキを作っていただく予定です。〝おまけ〟をもらうようでお得感がありますね。

ご主人の話　この家を自分では『60歳を過ぎてから使い勝手が良くなる家』と名付けているんですよ。トイレも浴室も広めにとったのはそのためなんですが、空間の広さだけでなく、住宅の性能にこだわったのも、先を考えてのことです。高性能住宅だから毎年毎年の冷暖房費も低く抑えられますしね。老後に快適に暮らせてこそ〝良い家〟ですよ。

リフォーム工房日野株式会社

對馬 雅人 様邸 ユーザー訪問

DATA
弘前市鳥井野
2012年8月竣工（リフォーム）
■延べ床面積／45.00坪（149.05㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（梁、建具の框）、ナラ（床）、タモ（カウンター）など。

長く暮らしてきた家がリフォームで再生できるのであれば、これからも大事に使った方がいい――。リフォーム工房日野㈱の日野高一社長（日野建ホーム㈱社長）はそう考える。代々住み継いできた家族の記憶や思い出が深く染み込んでいる古民家。長年にわたって家屋を支え家族を守ってきた古材を大事にし、床、壁、天井に断熱材を施して性能をアップさせれば、再生した古民家には新たな歴史がまた刻まれていく。冬場の寒さに悩まされていた築85年の對馬雅人様邸は、断熱改修に加え、地中熱とヒートポンプを組み合わせた最新の暖房システムを導入し、これまでの歴史と、これからの新しい生活の導入を両立させる居住空間へと生まれ変わった。

大きな台形の茅葺屋根 家の躯体まだまだ頑丈

ご主人の話　リフォームする

築85年の歴史を感じさせる趣のある和室

か、建て替えるか、本格的に考え出したのは、定年が4年後に近づいてきた頃です。茅葺屋根の築80年になる古い家ですから、普通なら建て替えるべきところでしょう。しかし、建物が傾いたり、床が落ちそうに下がって暮らしていけない状態なら建て替えに踏み切るのでしょうけど、台風19号のときに大きな台形の屋根の一部が吹き飛ばされた以外は、家の躯体はまだまだ頑丈で、凛と居座っている姿に新築の思いは砕かれたように思います。それは、3人の子供たちも同じようで、盆や正月休みに県外から帰省してきたときに家のことを話したら、3人とも新築に難色を示しました。今は3人とも自立して県外に住んでいますが、幼い頃に育ったこの家は心のよりどころであり、心のふるさとなのでしょう。

断熱改修することで天井を高くし、開放的な空間となったリビングルーム

この頃から気持ちはリフォームに傾いていましたが、それでも最近の新しい家はどんな造りになっているのか見るだけは見ておこうと、弘前近辺や青森市内の住宅展示場を訪ねてみました。応対してくれた社員の方に、「昭和初期に建った古い家なんだけど、リフォームを検討している」と聞いてみました。「当社でも古民家を手がけたことがあります。外壁にはサイディングを張りました」と胸を張って言ったんです。耳を疑いました。白壁の古民家を、味気ないサイディングを張り付けてしまうというのです。この言葉に強い衝撃を受けました。これでは、古民家を蘇らせることにはなりません。そんなことがあって、リフォームのことはやはり木造建築を熟知した大工職人に相談するしかないな、と思っていたところに、家内が、友人から日野建ホームの話を仕

入れてきたんです。

話というのは、その方が、今から10年前に日野建ホームで（弘前市と合併する前の）同じ岩木町に自宅を新築していて、リフォームでも新築でも家のことなら日野社長に相談してみるといい、と強く推薦してくれたんだそうです。実際に建てた人がすすめてくれるのですから説得力があります。電話をしたら、さっそく日野社長がやってきてくれました。

古民家の再生に本腰 大切な木材資源活用

日野社長の話　初めに床下を見てみました。土台が腐っていないか、シロアリの被害がないか、地盤が下がっていないかどうか。その確認が先です。對馬さんのお宅は、基礎に四角く削った石を置いて、その上にヒバの土台を敷き、床下の換気状態も良くて、木材に問題はありませんでした。

土台周りもしっかりしていました。建物そのものも良材が使われていて、ヒバの差鴨居（さしがもい）は高さが450ミリ（45センチ）もある立派なものでした。縦横に架けられてあるチョウナ掛けの梁はマツで、建てた当初は現わしになっていたのを、その後の改築で天井が低く張られていましたが、梁の上まで天井を引

立派なヒバの差鴨居（さしがもい）が天井を取り囲む玄関ホール

改修前は天井裏に隠れていて見えなかったマツの梁（左）と、リフォームして現わしに戻された天井（右）

き上げて現わしに戻しました。立派な木材を隠しておくのはもったいないですし、断熱改修したことによって天井を高くしても寒くないのでそれが可能になったのです。

ご主人の話　冬場の灯油運びがたいへんだったんです。FF式ストーブ2台の他に、持ち運びできるポット式ストーブが5台あって、しょっちゅう灯油のポリ缶を持ち運んできてはストーブに入れていました。高齢の両親が同居しているので、寒くないように1日中焚いていなければなりませんから、灯油代もばかになりません。寒くないように断熱改修することがリフォームの一番の目的でした。

日野社長の話　今から5年前（2007年）、青森市富田地区の「あいの保育園」の敷地内に、新潟県の山奥で廃屋となっていた古民家を移築したことがあります。その建物は、子育て支援の場として使われています。それをきっかけに、大切な木材資源の活用につながる古民家の再生に本腰を入れて取り組もうと古民家鑑定士の資格を取り、今年（2012年）3月に新会社のリフォーム工房日野㈱を設立しました。第1棟めの仕事が、對馬さんのお宅です。

ご主人の話　家が完成して一番喜んでくれたのは3人の子供たちでした。リフォームの完成をお祝いしようとお盆に帰省し、新築したみたいに新しくなったこと以上に、自分たちが生まれ育った家の面影が随所に残されていたことに心のよりどころを得たのでしょうか、その日は時を忘れて遅くまで語り合いました。家は、ふるさとなのですね。

地中熱とヒートポンプを組み合わせた最新式の暖房システムのパネルヒーター（画面左）

日野建ホーム株式会社
リフォーム工房日野 株式会社

青森市柳川1丁目2-62
TEL.017-723-6161 FAX.017-723-6166
http://www.hinoken-home.co.jp/
E-mail : info@hinoken-home.co.jp

ふるさとの木に親しもう